

台湾人日本語学習者における日中同形語の認知度

連 國鈞

要 旨

本研究では、日本語と中国語それぞれの文脈を基に、台湾人日本語学習者を対象とし、日中同形語に関する認知度の調査を行った。本調査の結果を見ると、認知度が高い文脈は、「日本語でも中国語でも使われる意味・文脈で作成した文」が多い。一方、認知度が低い文脈は、「日本語の意味・文脈のみにしたがいで作成した文」と「中国語の意味・文脈のみにしたがいで作成した文」が多い。しかし、逆のケースもないわけではない。このことから、同一の漢語熟語文であっても、文脈によって認知度が異なることが明らかになった。つまり、ひとつの単語で認知度の高低を判定するのは難しいと考えられる。単語の調査に加え、日中それぞれの文脈の調査も合わせれば、日中同形語の認知度または習得度について、より信憑性の高いデータが得られよう。また、分析により、何が誤答と正答に影響を与えたかを解明した。

【キーワード】 台湾人日本語学習者、中国人日本語学習者、日中同形語、誤用、認知度

1. はじめに

台湾の公用語は中国語¹⁾のため、全ての表記に漢字が使用されている。特に台湾においては繁体字が使用され、日本語の漢字表記に近い。そのため、台湾人は日本語を学習する際、他の学習者に比べ、漢字を学習しやすく、文章を読む際、漢字があれば意味が類推できる。しかし、日本語と中国語の漢字が同じように書かれたとしても、意味がすべて同一というわけではない。日中同形語が少なからず存在するため、台湾人の日本語には母語から直訳した表現が多く見られ、誤用が現れやすくなる。したがって、母語が日本語を学習する際の障害になることもある。

『中国語と対応する漢語』(文化庁1978)は、日中同形語を以下の4種類に分類した。

表1 『中国語と対応する漢語』(1978)における日中同形語の4分類

S (Same)	日中両国語における意味が同じか、または、きわめて近いもの
O (Overlap)	日中両国語における意味が一部重なっているが、両者の間にずれのあるもの
D (Different)	日本語と中国語において、意味が著しく異なるもの
N (Nothing)	日本語の漢語と同じ漢字語が中国語に存在しないもの

分類された日中同形語の種類の中ではS語が最も多く、全体の3分の2に達していると

¹⁾ 台湾では「国語」と呼ばれているが、多くの読者にわかりやすいように、本研究では「中国語」を用いる。

されている。とはいえ、日中同形語の意味が同じ場合でも、言葉の使い方は必ずしも同一とは限らないため、中国語の漢語を日本語にそのまま持ち込むと、不自然な日本語になることもある。例えば「従来」という漢語は、中国語でも「以前から、今まで」という意味であるが、中国語の用法をそのまま使うと、「私は従来、海外旅行へ行っていない」というような不自然な日本語になってしまう。

このような日中同形語の誤解・誤用が起こる原因は、母語の影響で、漢字の知識があるため、文章や作文を書く際、わからない語彙をただ辞書で引き、中国語と同じ言葉を見つけ、そのまま使用してしまうということにもあると考えられる。これらの誤用は学習時間が増えるとともに、減るわけではない。日本語能力試験の1級に合格した台湾人学習者にすら、日中同形語の誤用がよく見られる。

筆者の学習経験からみても、日中同形語の誤用は一般的であるが、学習者自身には日中同形語で誤用を犯した自覚がない。したがって、台湾人日本語学習者において、日中同形語の誤用が減少しない原因を探るためには、まず、日中同形語に関する認知度の調査が必要だと思われる。また、誤用が起こりやすい(認知度が低い)日中同形語が存在する一方で、母語の知識を利用しながらも、誤用が起こりにくい(認知度が高い)日中同形語もあるのではないかと推測する。そこで、日中同形語の誤答と正答との間の関係、および影響を明らかにしたいと考えた。さらに、正用の利点を活かしながら、誤用を改善するための指導法が必要だと感じた。

2. 先行研究

2.1 日中同形語の定義

「日中同形語」の概念については、様々な定義が論じられているが、今の時点ではまだ統一されていない。

大河内(1997:412)は、「いずれがいずれを借用したかを問わず、双方同じ漢字(簡体字は問わない)で表記されるものを同形語と呼ぶ」と定義している。また、同形語といっても、「山、人」など一字で音訓いずれにも使われるものは含まない。「文化、経済」のような二字以上の字音語で、表記だけでなく語構成が問題になるものである。語構成における共通性が同形語と言われるからであると述べている。

何(2011)は、日中同形語とは、音訓の読み方・文字数・借用関係を問わず、日中両国の文字改革によりもたらされた字体の相違があっても、漢字のものが同じであり、日本語と中国語の間に存在している同形の漢字語であると定義している。

以上の先行研究を踏まえ、本研究では、日本語の字体を基にして、日中同形語を「日本語と中国語が同じ構成によって表記される二字以上の漢語」と定義する。

2.2 日中同形語数

現在の漢語の中で、日中同形語の数を統計するのがそれほど容易ではないため、これまでの先行研究の統計方法は、著者が依拠する基準により、以下に示すように異なる結果が

出ている。

表2 先行研究における日中同形語数

先行研究	調査語語数	同形語語数	割合
曾根(1988)	6,112	3,395	55.5%
橘(1994)	8,822	4,683	53%
王(1998)	31,797	13,026	40.9%

2.3 日中同形語に関する先行研究

陳(2003)は、日中同形語の難易度を検証するために、漢語を同義語・類義語・異義語・脱落語の4タイプに分け、中国語を第一言語とする台湾人日本語学習者を対象に質問紙を用いて、全部40問で、それぞれひとつの日本語の単語に対する適切な中国語の意味を選んでもらう(例:地味、①故郷的味道 ②地方的小吃 ③樸素 ④特色)という調査を実施した。また、日本語能力の違いによって、4タイプの漢語難易度は異なるのかも調査した。その結果、まず、類義語と異義語は、難度が高いという結果が出た。次に、学習者の日本語能力の違いによって、4タイプの漢語難易度は異なることが検証された。さらに、日本語能力の向上につれ、難しさが徐々に減少されていることが確かめられたが、台湾人日本語学習者にとって日本語能力が上がっても、やはり習得しにくいものが存在していると指摘した。

小森・玉岡・近藤(2008)は、中国語を第一言語とする日本語学習者のO語やD語の認知処理過程が日本語習熟度の向上に伴って、どのように変化するかを検討するために、実験でそれぞれ20個のO語とD語を用いて、中国語義で解釈すると意味が通るが、日本語では非文となるような文(例:パソコンに文字を輸入する)を作成し、調査対象者に文正誤判断課題を行った。その結果については、(1)日本語習熟度に関わらず、反応時間は長く、誤答率も高い。(2)O語よりD語のほうが判断が迅速であるとしている。

2.4 本研究の位置づけ

本研究では、先行研究を踏まえ、中上級レベルの学習者でも誤用率が高く、習得しにくい日中同形類義語と異義語を主な調査対象語とし、台湾人中上級レベル日本語学習者を調査対象とする。

日中同形語に関する認知意識の調査については、先行研究で行われているように、日中同形語の認知度や習得をひとつの単語またはひとつの文で計るという方法が見られないわけでもない。ただし、学習者にとっては、同じ漢語の含まれた文であっても、文脈によって日中同形語に関する認知度の判断も異なるため、本研究では日中それぞれの文脈を基に調査を行う。

3. 日中同形語に関する認知度調査

3.1 調査語選択基準と理由

本研究では、文化庁が出版した『中国語と対応する漢語』(1978)のO語、D語と『日中

同形異義語辞典』(2007)に分類されている語彙の中から、それぞれ4語と2語を選び、李(2006)と小森・玉岡・近藤(2008)から4語を選び、計10の漢字二字熟語を調査語として選定した(表3)。

『中国語と対応する漢語』(1978)は文化庁が出版したもので、日中同形語研究の古典的な文献である。多くの日中同形語に関する先行研究がこの本を参考に、調査語を選択している。そのため、本研究でも『中国語と対応する漢語』(1978)から「認識」、「深刻」、「関心」、「検討」を選んだが、その4語は李(2006)、小森・玉岡・近藤(2008)も扱っており、重要語と考えた。次に、李(2006)、小森・玉岡・近藤(2008)の語彙選択基準と選択された調査語から「愛情」、「嚴重」、「培養」、「熱心」の4語を選択した。さらに、『中国語と対応する漢語』(1978)にはO語とD語の掲載数が少ないため、『日中同形異義語辞典』を参照し、そこから「注意」、「掌握」の2語を選択した。『日中同形異義語辞典』は2007年に出版された比較的新しい辞典である。また、調査対象が中上級レベルの学習者のため、「勉強」、「家族」、「勉強」、「家族」のような区別しやすい日中同形語は選択範囲から除外した。

なお、日本と台湾で使用される字体が異なることもあるため、字体は日本語を基にした。

表3 選択した日中同形語一覧

同形語	出典	同形語	出典
1. 認識	中国語と対応する漢語(O)(1978)	6. 嚴重	小森・玉岡・近藤(2008)
2. 深刻	中国語と対応する漢語(O)(1978)	7. 培養	小森・玉岡・近藤(2008)
3. 関心	中国語と対応する漢語(D)(1978)	8. 熱心	小森・玉岡・近藤(2008)
4. 検討	中国語と対応する漢語(D)(1978)	9. 注意	日中同形異義語辞典(2007)
5. 愛情	李(2006)	10. 掌握	日中同形異義語辞典(2007)

3.2 日中同形語認知度調査

中上級レベル台湾人日本語学習者における日中同形語の認知度を調査するために、アンケート調査を実施した。

アンケートの構成としては、選定した10語について、日本語、中国語のそれぞれでしか出現しない文脈と、日本語でも中国語でも使われている文脈にしたがい、各語ごとに3つの文、計30の問題文を作成し、学習者に文の正誤を判断してもらうという形である。

問題文の作成については、まず、日中両語の辞書的意味にしたがい、それぞれの辞書の例文を参考にした。辞書は、日本語では『大辞林』(第3版)、中国語では台湾の『教育部重編國語辭典修訂本』²⁾を採用した。さらに、日本の「KOTONOHA現代日本語書き言葉均衡コーパス」と台湾の「現代漢語平衡語料庫」というコーパスを参照し、日本語の正文と非文を作成した。正文としたものは、「日本語の意味・文脈のみにしたがい作成した文」であり、「中国語の意味・文脈のみにしたがい作成した文」は、日本語には存在しないため、非文とした。「日本語でも中国語でも使われる意味・文脈で作成した文」は、両方とも存

²⁾ 台湾の教育部は日本で言う文部科学省に相当する政府機関である。

在するため、正文とした。また、長い文は調査対象者に対し、正誤判断の影響を与える可能性があり、書く時間もかかるため、本調査は長い文を避け、調査する語を含め、意味文脈を十分備えた短い文を作成した。

そして、作成した文の適切さを確認するために、日本語母語話者7名に判定してもらい、5名以上が適切だと判定したものを採用した。不適切な文という結果が出たものについては、ほかの文に変更し、改めて日本語母語話者に判定してもらった。文の難易度については、日本に留学している台湾人中国語母語話者4名に確認してもらい、3名以上が判断しにくい文とした時は、同様にほかの文に変更した。

以上のようなプロセスを経て、本調査用アンケートの問題文を作成した。

3.3 調査概要

本調査は2012年2月17日から2012年2月29日にかけて実施した。調査対象については、台湾台北のB大学で日本語を専攻し、「上級日本語」を受講している台湾人中国語母語話者の学習者を対象とした。この理由としては、「上級日本語」は日本語学科3年生以上の学習者しか取れないだけでなく、この授業を取る前に、「初級日本語」と「中級日本語」という授業を履修済みである。そのため、「上級日本語」を履修中の学習者の日本語能力は中級以上のレベルに達すると思われるからである。

アンケート調査をする前に、当該授業の教師に予め許可を得て、授業中に用紙を配布し、20分後回収した。

授業を履修している学習者は、両クラスをあわせて109名である。そのうち、アンケートの無効数は9部で、有効数はちょうど100部（うち男性19名、女性81名）であった。この100名の協力者のプロフィールは以下のとおりである。

表4 調査協力者プロフィール

2012年2月現在

性別 ³⁾	男性：19名	女性：81名
年齢	100名全員20代	
日本語学習歴	1年6ヶ月：1名	4年1ヶ月～4年6ヶ月：2名
	2年1ヶ月～2年6ヶ月：45名	4年7ヶ月～5年：1名
	2年7ヶ月～3年：30名	5年1ヶ月～5年6ヶ月：1名
	3年1ヶ月～3年6ヶ月：10名	5年7ヶ月～6年：2名
	3年7ヶ月～4年：3名	無記入：5名
日本語レベル (日本語能力試験)	旧2級：1名	N2：27名
	N4：1名	N1：3名
	N3：15名	未受験：53名
日本の滞在経験	有：14名（1ヶ月：10名、2ヶ月：2名、10ヶ月：1名、1才～5才：1名）	
	無：86名	

³⁾ 男女差の可能性はあるが、今回は約8割が女性であるため、性別の分析はしない。

3.4 フォローアップインタビュー調査

アンケート調査では得られなかった情報を補うため、2012年8月28日から2012年9月12日にかけて、本調査でアンケートを書いてもらった100名の台湾人日本語学習者のうち、7名(男性2名、女性5名)にフォローアップインタビュー調査を行った。

4. 調査結果分析

4.1 分析方法

アンケート調査集計結果は調査文を正答率の順に並べたものである。各文脈を順不同に並べかえているため、ひとつの語が3カ所に現れることになる。その中で、各語の正答率の特徴により、「正答率の高いペアを持つ語」、「正答率の低いペアを持つ語」、「正答率のばらつきが大きい語」という3つのグループに分け、分析を進める。

すべての調査語が、日中両方で可能な文脈、日本語のみで可能な文脈、中国語のみで可能な文脈の3つの文脈を持つ。このうち、ひとつの語で、正答率が7割を上回る文脈を正答率の高い文脈とする。ひとつの語で、3つの文脈すべてが7割を上回ったものはない。ふたつあったものは以下の4.2.1に列挙するとおりである。これらを「正答率の高いペア」と呼ぶ。一方、ひとつの語で、正答率が4割を下回る文脈を正答率の低い文脈とする。ひとつの語で、3つの文脈すべてが4割を下回ったものはない。ふたつあったものは以下の4.2.2に列挙するとおりである。これらを「正答率の低いペア」と呼ぶ。そして、残りは3回答間の正答率のばらつきが大きいため、ひとつのグループとして取り上げる。

また、「日本語の意味・文脈のみにしたがいで作成した文」には、文脈の日本語文「日」の欄に「○」を、中国語文「中」の欄に「×」を記入する(以下【日】)。「中国語の意味・文脈のみにしたがいで作成した文」には、「日」の欄に「×」、中」の欄に「○」を記入する(以下【中】)。「日本語でも中国語でも使われる意味・文脈で作成した文」には、文脈の「日」と「中」の欄両方に「○」を記入して、示す(以下【日中】)。

4.2 分析結果

4.2.1 グループ1

まず、正答率が高い上位ふたつの「正答率の高いペア」を持つ語を検討した。

「正答率が高い」ということの基準については、7割の人が正答したものは、正答率としては満足と考え、「高い」とした。

(1) 注意

質 問 項 目	正答率	文脈	
		日	中
①夏は特に食べ物の衛生に <u>注意</u> する必要がある。	97%	○	○
②健康状態によくよく気をつけるよう <u>注意</u> をされた。	80%	○	×
③いつも自分の態度や振る舞いに <u>注意</u> すべきである。	58%	○	○

(2) 認識

質 問 項 目	正答率	文脈	
		日	中
①私は彼を3年前から <u>認識</u> している。	78%	×	○
②今日の講演を通して、我々は教育に対する <u>認識</u> を深めることができた。	77%	○	○
③私は自分の性格を、客観的によく分析し、 <u>認識</u> している。	64%	○	×

(3) 掌握

質 問 項 目	正答率	文脈	
		日	中
①有名大学医学部教授は、強大な権力を <u>掌握</u> している。	77%	○	○
②彼は3つの外国語を上手に <u>掌握</u> できる。	71%	×	○
③部下を <u>掌握</u> するには、まず名前を覚えることである。	44%	○	○

グループ1については、以下のような回答傾向がまとめられる。

(1) 【日中】の文は正答率が高い

【日中】の文は、日本語でも中国語でも使われているため、正答率が高いと予測した。結果を見ると、文の正答率が70%以上のペアを持つ語は、どちらのペアでも、【日中】の文となり、予測に合致している。例えば、「注意①」、「認識②」、「掌握①」である。

ただし、その中で、「認識②」のように正答率がやや低い80%以下になった文もある。この原因を学習者に尋ねたところ、「～を通して」のような日本語能力試験2級相当の表現と「深める」のような日本語能力試験1級相当の語が文中にあるからなどの返答があった。このことから、日中両方で同じ意味で使われる語でも、調査対象語以外に日本語能力試験級内のやや難しい文型や単語が同一文中に使われたことが、文の正誤判断に影響を与えたのだろうと推測される。また、「掌握①」の文には他に特に難しい表現がないため、正答率は非常に高いはずにもかかわらず、やや低い77%の正答率になった。この原因については、フォローアップインタビューで調査したところ、この文の「掌握」を「持っている」に変えたほうが自然だと回答した学習者がいた。したがって、この文は日中で同じ意味で使われる文であるが、読み手によっては違和感を持ったためか、正答率は77%になったと思われる。

(2) 正答率が高いペアには【日】【中】の文もある

【日】と【中】は、それぞれ日本語と中国語の意味・文脈にしたがい作成した文のため、台湾人学習者はこれらの文に対する認知度が低いと予測した。しかし、結果を見ると、正答率が70%以上の【日】と【中】の文もある。これは、調査対象者が中上級レベルの学習者であるため、日本語授業で学習したことがあり、または日本語コーパス⁴⁾によれば使用頻

⁴⁾ KOTONOA 現代日本語書き言葉均衡コーパス。

度が高いため、その語を使った文脈を目にしたことがあるからであろう。したがって、【日】【中】の文でも、高い正答率につながったと思われる。例えば、「注意②」、「認識①」である。

また、【中】の「掌握②」については、「掌握」という語は日本語コーパスによれば使用頻度が低いため（使用頻度：550、2012年12月20日検索）、日本語教科書にもあまり出てきていないと考えられる。これにより、学習者が「掌握」を使った文を目にする機会が少ないため、判断の手がかりは母語としての中国語知識のみだと思われる。しかし、中国語の場合には「上手」と「掌握」を組み合わせる表現はないのではないだろうか。さらに、この文は非文のため、日本語の場合にも「上手」と「掌握」のような組み合わせもない。したがって、学習者にとっては、日本語でも中国語でも判断の頼りがいがないため、この中国語文脈で作成した非文の正答率は低いという予測があり得るにもかかわらず、調査結果では71%になった。稿者の推測を確認するために、フォローアップインタビューで尋ねたところ、日中でも「上手」と「掌握」のような組み合わせを見たことがないため、この【中】の非文を不正解だと判断した人がいたことが明らかになった。

ところが、その中で、正答に辿りついてはいるが、文脈と意味の確かな理解に基づいて、判断したわけではないケースもある。例えば、【日】の「注意②」について、学習者が「注意」を日本語と中国語との共通の意味の「気をつけること。気をくばること」と考え、頭の中で中国語文の「注意健康状態」と産出した可能性もある。つまり、学習者は文型（「注意をされた」という受身の文型）や文の構造を無視し、並んだ漢字が伝える意味から直接推測し、この文の「注意」を日中共通の意味と間違えた結果、正文だと判断したのではないだろうか。この点を確認するために、フォローアップインタビューで尋ねたところ、やはりこの文の「注意」を日中共通の意味の「気をつけること。気をくばること」と考え、さらに並んだ漢字が伝える意味から直接推測した学習者がいたことが判明した。

(3) 正答率が高いペアに入らなかった例文でも、【日中】の文がある

「認識③」のような【日】の文でも、正答率が高いペアに入らなかったのは予想どおりであるが、ペアから離れた【日中】の文もある。これは文の中に、学習者が理解できない言葉があったことが原因だと思われる。例えば、「注意③」の文には「振る舞い」という語がある。「振る舞い」は日本語能力試験の級外の単語であるため、意味がとれない学習者がいてもおかしくない。この点について、学習者に聞いてみたところ、確かに、「振る舞い」の意味がとれない学習者が少なくなかった。つまり、このケースも(1)で説明したように、文中で共に使われた語の難易が、文の正誤判断に影響を与えたのではないだろうか。

しかし、同じ【日中】の文に属する「掌握③」の文には、難しい言葉がないにもかかわらず、正答率が低かった。この原因について、誤答者に聞いたところ、この文の「掌握」を「了解」、「認識」、「把握」にしたほうが自然だと述べた。しかし、「部下を了解する」、「部下を認識する」⁵⁾のような表現は日本語にはないようであるが、中国語に変えると、よく使われる表現だと思われる。このことから、「部下を掌握する」という表現については、

⁵⁾ 稿者注：協力者の意図は共に、「部下のことをよく知っている」と考えられる。

多くの学習者が日本語の使い方を知らず、さらに、読み手によっては違和感を持ち、無意識に中国語で考えたと思われる。その結果、日中同じ意味で使われる文であるが、正答率は44%になったと考えられる。

4.2.2 グループ2

次に、下位ふたつの「正答率の低いペア」を持つ語を検討した。

「正答率が低い」ということの基準については、「低い」を40%以下とした。

(1) 深刻

質 問 項 目	正答率	文脈	
		日	中
①今回の海外旅行は私の心に <u>深刻</u> な印象を残している。	32%	×	○
②怪我をさせちゃったからといって、そんなに <u>深刻</u> に捉えなくても大丈夫だと思う。	38%	○	×
③彼との事で <u>深刻</u> な悩みがある。	50%	○	×

(2) 培養

質 問 項 目	正答率	文脈	
		日	中
①親は子どもが小さい時から、子どもの自信を <u>培養</u> したほうがいい。	35%	×	○
②男女は普段友達の関係から感情を <u>培養</u> し、以後付き合う可能性が高まる。	36%	×	○
③妊娠14～18週ころに採取した細胞を <u>培養</u> して検査に提供する。	62%	○	○

(3) 関心

質 問 項 目	正答率	文脈	
		日	中
①仕事がどんなに忙しくても、家族に <u>関心</u> すべきである。	32%	×	○
②人から話を聞き取るとき、最も重要なのは、その人への <u>関心</u> の大きさである。	38%	○	○
③国民は政治的な議題について <u>関心</u> を持っている。	88%	○	○

(4) 熱心

質 問 項 目	正答率	文脈	
		日	中
① <u>熱心</u> に新聞を読んでも、意外性を感じる事があまりなかった。	24%	○	×
②彼女は友達にとっても <u>熱心</u> である。	31%	×	○
③彼は自分の研究に非常に <u>熱心</u> である。	79%	○	○

グループ2については、以下のような回答傾向がまとめられる。

(1) 正答率の低いペアに【日】【中】の文が多い

【日】と【中】がそれぞれの使い方を持っているため、台湾人学習者はこれらの文脈で正誤が判断しにくいと予測した。この調査の結果、やはり正答率の低いペアには【日】【中】の文が多いことが明らかになった。

この原因については、「深刻②」、「熱心①」のような【日】の文は、日本語の意味・文脈にしたがい作成したものであるため、これを見て、不自然だと思った学習者が多かったであろう。さらに、「深刻②」の文には、「～からといって」のような日本語能力試験2級相当の表現も使われているため、学習者にとっての文脈理解の困難度を少し増したと思われる。つまり、調査する語および文脈とは関係なく、文中で共に使われる表現や言葉の難易が、文の正誤判断に影響を与えたのではないだろうか。

一方、【中】の文が中国語の意味・文脈にしたがい作成したものであるため、台湾人学習者はこのまま日本語に変えた文に違和感をほとんど感じなかった結果、誤答人数が多くなったからであろう。例えば、「深刻①」、「培養①」、「培養②」、「関心①」、「熱心②」は明らかな負の転移のケースだと思われる。ただし、「関心①」の低正答率は中国語の言い方に影響されただけでなく、「関心」の品詞に関し、「非動詞性の語を動名詞ととらえた」⁶⁾という誤りもひとつの原因だと思われる。

(2) 正答率の低いペアに【日中】の文もある

正答率が低いペアの中に「関心②」のような【日中】の文もある。なぜかという、フォローアップインタビュー調査を通して、それは多くの学習者が文の中の「聞き取る」という言葉が理解できなかったからである。このことから、【日中】の文だとしても、文に「聞き取る」のような日本語能力試験の級外の単語があったことが、多少文の正誤判断に影響を与えたと思われる。

(3) 正答率の低いペアに入らなかった例文は【日中】の文が多い

グループ1の回答傾向における(1)で述べたように、【日中】の文は日本語でも中国語でも使われているため、正答率が高いと予測された。調査の結果を見ると、正答率の低いペアに入らなかった文は、【日中】の文が多いことが判明した。例えば、「培養③」、「関心③」、「熱心③」である。ただし、その中で「培養③」の正答率が62%になった理由をフォローアップインタビューで尋ねたところ、学習者がテストの回答テクニックの応用、つまり3問の答えのバランスで判断した、あるいは日中同形語や文中で共に使われる表現や言葉の難易とは関係なく、文の意味の適切性から正誤を判断した学習者もいたことが明らかになった。

4.2.3 グループ3

3回答間のばらつきが大きい語群である。

⁶⁾ 五味・今村・石(2006)は、これはある二字漢語が動詞性を備えているかどうかの判断が、日本語と中国語とではズレがあるという問題であると述べている。その中で、動名詞を非動詞性の語としてとらえる誤用はあるし、非動詞性の語を動名詞ととらえる誤用もあるという。

(1) 愛情

質問項目	正答率	文脈	
		日	中
①彼は元彼女に裏切られたことがあるから、 <u>愛情</u> というものがない。信用できない。	85%	○	○
②家庭の主婦にできるのは、 <u>愛情</u> をたっぷり注いだ料理を作ることである。	47%	○	×
③どんな会社の社長でも、自分の会社に深い <u>愛情</u> とプライドを持っているものである。	18%	○	×

(2) 検討

質問項目	正答率	文脈	
		日	中
①これを売却していいかどうかということを徹底的に <u>検討</u> する。	80%	○	○
②学校の量的及び質的充実を掲げ、授業カリキュラムの <u>検討</u> に入っている。	51%	○	×
③どんなことでも他人のせいで、自分が <u>検討</u> できない人は、成功できないだろう。	31%	×	○

(3) 嚴重

質問項目	正答率	文脈	
		日	中
①台風が上陸する恐れがあるとして、気象庁は暴雨や高波に対する <u>嚴重</u> な警戒を呼び掛けた。	76%	○	○
②この問題は非常に <u>嚴重</u> である。	61%	×	○
③詳細で <u>嚴重</u> なチェック体制を確立すべきである。	43%	○	×

グループ3については、以下のような回答傾向がまとめられる。

(1) 最も高い正答率はすべて【日中】の文である

3つの回答問のばらつきが大きい語だとしても、やはりそれぞれの正答率が最も高いのは「愛情①」、「検討①」、「嚴重①」のような【日中】の文であり、しかも、正答率も76%～85%と高い数値を示している。

【日中】の文は日本語でも中国語でも同じ意味・文脈で使われる文のため、学習者はこのような文を見て、あまり違和感を感じなかった結果、正答率は予想どおりに高いが、やや低い文もある。例えば、「検討①」については、誤答者に聞いたところ、「徹底的に検討する」が中国語の表現の「徹底検討」と非常に似ているため、日本語には同じ用法があるのかと考えながら、もしかしてこの質問には落とし穴があるのではないかと思った結果、不正解だと判断したと述べている。また、ある学習者は「嚴重①」を「深刻」、「重大」などの語に変えたほうが自然だと思ったため、誤答になってしまったという。つまり、【日中】の文でも、日本語文をあまり目にしなかったら、学習者にとってはなかなか正誤が判断できないのであろう。

(2) 最も高い正答率の文を除き、【日】【中】の文である

【日】の場合

【日】の文は「愛情②」、「愛情③」、「検討②」、「嚴重③」であるが、正答率は18%~51%で、非常にばらつきがある。

「愛情③」、「検討②」、「嚴重③」は共に中国語にはない表現であるため、学習者はこのような文を見ると、違和感を強く感じ、正答率は低いはずにもかかわらず、「愛情③」の18%を除き、「嚴重③」は43%、「検討②」は51%という予想より高い正答率となった。それは正答者が日本語の「嚴重」には「厳か」、「厳密」という意味があるのを知っている、日本語の「検討」の意味の中に、中国語の「討論」の意味があるとわかっているからである。ただし、学習者が誤答になった理由は、【日】の文を見たことがないため、違和感を感じただけでなく、「検討②」の調査結果を見ると、日本語と中国語の品詞に関する用法の相違も誤答になった原因のひとつだと思われる。また、「検討②」に「カリキュラム」のような日本語能力試験の級外の語が同一文中に使われていたら、やはり中上級の学習者にとっても文の正誤判断がなかなかできないのであろう。

次に、「愛情②」については、「愛情をたっぷり注いだ料理を作る」という表現が中国語にはないわけではないが、日本と台湾の社会背景が異なることがあるため、台湾人学習者には「家庭の主婦」と「愛情を注いだ料理」とのつながりがあまり感じられなかった結果、非文だと判断した学習者が多かったと思われる。しかし、それに対して、47人が正答になった理由は、「愛情」の日中共通の意味の「異性を恋い慕う感情」と考え、並んだ漢字が伝える意味から直接推測し、「主婦は旦那に愛情をたっぷり注いだ料理を作る」とイメージしたからであろう。このことから、「愛情②」は正答率が47%になったが、学習者は本当に文脈と意味を理解してから、判断したわけではないことが判明した。

【中】の場合

「検討③」は【中】の文であるため、このまま日本語に変えた場合に違和感を感じる台湾人学習者が少なかった結果、31%の正答率になったのは予想どおりである。しかし、「嚴重②」も【中】の文であるが、正答率は予想より高い61%になった。この原因をフォローアップインタビューで学習者に尋ねたところ、このような文は教師に何回も注意されたため、正解の「深刻」がわかったと述べている。つまり、これは正答者が教師に注意されたことがあるという理由があり、正解を知っているからである。

5. 総合的考察とまとめ

5.1 文脈による認知度の判断の異なり

本調査の結果を見ると、認知度が高い文脈は【日中】の文が多い。一方、認知度が低い文脈は【日】【中】の文が多い。しかし、逆のケースもないわけではない。このことから、同一の漢語熟語文であっても、文脈によって認知度が異なることが明らかになった。また、分析により、何が誤答と正答に影響を与えたかを解明した。

5.1.1 【日中】の認知度の低さの理由

認知度が高い文脈はやはり【日中】の文が多いが、認知度がやや低い、あるいは低い【日

中】の文もある。その理由を以下に挙げる。

(1) 日本語能力試験級内のやや難しい文型や単語が同一文中に使われたこと

日中両方で同じ意味で使われる文でも、調査対象語以外に日本語能力試験級内のやや難しい文型や単語が同一文中に使われたことが、文の正誤判断に影響を与えたと思われる。

(2) 日本語能力試験の級外の単語が同一文中に使われたこと

問題文に日本語能力試験の級外の単語があったことも、文の正誤判断に影響を与えたと考えられる。

(3) 文の意味の適切性

調査対象の日中同形語や文中で共に使われた表現とは関係なく、文の意味の適切性から正誤を判断した学習者もいた。

(4) 読み手による違和感

【日中】でも、読み手によっては違和感を持ち、文の正誤判断に影響したと考えられる。

(5) テストの回答テクニックの応用

学習者がアンケートの質問に3問とも「○」、あるいは「×」は不自然だと思ったことが、正誤の判断を左右した可能性がある。

(6) 日本語の文をあまり目にしないこと

【日中】だとしても、日本語の文をあまり目にしたことがなければ、学習者はなかなか正誤が判断できないと思われる。

(7) 日本語と中国語の用法の同一性に対する迷い

日本語にも中国語の表現と同じ用法があるかどうか迷った結果、【日中】の文を不正解だと判断した学習者がいた。

5.1.2 【日】【中】の認知度の低さの理由

認知度が低い文脈は【日】【中】の文が多い。その理由は次のとおりである。

【日】の場合

(1) 【日】の文が不自然だと感じたこと

【日】の文が日本語の文脈にしたがい作成されたものであるため、これを見て、不自然だと感じた学習者が多かった。

(2) 日本語能力試験級内のやや難しい文型が同一文中に使われたこと

【日中】の文と同じく、調査対象語以外に日本語能力試験級内のやや難しい文型が同一文中に使われたことが、学習者にとっての文脈理解の困難度を少し増したと思われる。

(3) 日本語能力試験の級外の単語が同一文中に使われたこと

日本語能力試験の級外の単語が同一文中に使われることで、文の正誤判断がより難しくなったと考えられる。

(4) 品詞の誤用

日本語と中国語の品詞に関する用法の相違が、誤答を引き起こした原因のひとつと思われる。

(5) 日本と台湾の社会背景の相違

日本と台湾の社会背景が異なることにより、日中同形語の意味が同じ場合でも、文脈が同一とは限らない。日本の社会背景を理解する台湾人学習者はそれほど多くないため、【日】の文の正誤判断に影響をもたらしたのではないだろうか。

【中】の場合

(1) 【中】に対する違和感なし

【中】の文が中国語の文脈にしたがい作成したものであるため、台湾人学習者はその文脈をそのまま日本語に変えた文に対し、違和感をほとんど感じなかった結果、誤答人数が多くなったと思われる。

(2) 品詞の誤用

日本語と中国語の品詞に関する用法の相違により、誤答となったケースも【中】で現れた。

5.1.3 【日】【中】の認知度の高さの理由

認知度が予想より高い【日】【中】の文もある。その理由を以下に示す。

【日】の場合

(1) 中上級レベルの調査対象者

本調査の調査対象者は中上級レベルの台湾人学習者であるため、【日】の文でも、日本語授業で学習したことがあれば、適切な判断ができたのであろう。

(2) 使用頻度の高さ

使用頻度が高い語は、学習者がその文脈を目にしたことがある可能性が高い。したがって、正用を知っているため、適切な判断ができたのだと思われる。

(3) 文脈、漢字からの直接推測

【日】の文で正答に辿りついてはいるが、文脈と意味の確かな理解に基づいて、判断したわけではないケースもある。それは学習者が文型や文の構造を無視し、文脈と並んだ漢字が伝える意味から直接推測、イメージして正解したケースである。

【中】の場合

(1) 語と語の組み合わせを見たことがないこと

学習者は、文の中に中国語でも一緒に使われない漢語の組み合わせを見ると、日本語でも中国語でも判断の頼りがないため、【中】の非文を不正解だと正しく判断した人がいたことが明らかになった。

(2) 正用を知っていること

【中】であっても、学習者が正用を知っている場合には、非文だと判断できると思われる。

(3) 教師が説明したことがある、または教師に注意されたことがあること

日中同形語の違い、用法を教師が説明したことがあれば、または学習者が誤用を教師に注意されたことがあれば、学習者は母語からの負の転移を受けず、適切な判断が下せたとあろう。

5.2 ひとつの単語で認知度の高低判定を試みることの不十分さ

稿者は本研究を行う前に、誤用が起りやすい（認知度が低い）日中同形語が存在する一方で、母語の知識を利用しながらも、誤用が起りにくい（認知度が高い）日中同形語もあるのではないかと推測した。

しかし、本研究の調査結果から、学習者にとっては同じ漢語で作った文であっても、文脈によって日中同形語に関する認知度の判断が異なることが明らかになった。つまり、ひとつの単語で認知度の高低を判定するのは難しいと考えられる。単語の調査に加え、日中それぞれの文脈の調査も合わせれば、日中同形語の認知度または習得度について、より信憑性の高いデータが得られよう。

6. 今後の課題

本研究では、日中それぞれの文脈を基に、日中同形語の認知度に関する研究を行ったが、まだ課題が残っている。

日本で生活したことがある学習者と生活したことがない学習者は、たとえ日本語能力試験の1級に共に合格しているとしても、日本語レベルは同じとは限らないため、日中同形語の認知度も異なると思われる。本調査では、日本の滞在経験がほとんどなく、台湾の大学に在籍している日本語学習者を対象としたが、今後の課題として、日本での生活経験がある台湾人学習者を対象に調査し、両者の違いを分析し、より良い日中同形語の教授法を検討したい。また、日本語母語話者の日中同形語に対する認知度は台湾人と異なるはずであるため、日本人における日中同形語の認知度についての考察も必要だと考える。

最後に、台湾の中国語と中国の中国語には、中国語同形語にどのぐらいの違いがあるか、それぞれ日中同形語に何らかの関係、影響があるかということに取り組みたい。

参考文献

- 王蜀豫(1998)『『現代国語辞典』における同形語』『新潟大学国語国文学会誌』40, 新潟大学, pp.1-11
- 王永全・小玉新次郎・許昌福(2007)『日中同形異義語辞典』東方書店
- 大河内康憲(1997)「日本語と中国語の同形語」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお
- 何宝年(2011)「『中日同形語』の定義」『愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会言語文化』19, 愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会紀要編集委員会, pp.35-49
- 五味政信・今村和宏・石黒圭(2006)「日中語の品詞のズレ — 二字漢語の動詞性をめぐって—」『一橋大学留学生センター紀要』第9号, 一橋大学, pp.3-13
- 小森和子・玉岡賀津雄・近藤安月子(2008)「中国語を第一言語とする日本語学習者の同形語の認知処理—同形類義語と同形異義語を対象に—」『日本語科学』第23号, 国書刊行会, pp.81-94

- 三省堂(2006)『大辞林』第3版, 三省堂
- 曾根博隆(1988)「日中同形語に関する基礎的考察」『明治学院論叢』424, 明治学院大学, pp.61-96
- 橘純信(1994)「現代中国語における中日同形語の占める割合」『国際関係学部研究年報』第15集, 日本大学国際関係学部, pp.99-106
- 陳毓敏(2003)「中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得について—同義語・類義語・異義語・脱落語の4タイプからの検討—」『平成15年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 社団法人日本語教育学会, pp.174-179
- 文化庁(1978)『中国語と対応する漢語』文化庁
- 李愛華(2006)「中国人日本語学習者による漢語の意味習得—日中同形語を対象に—」『筑波大学地域研究』第26号, 筑波大学大学院地域研究科, pp.185-203

参考サイト

- KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」
<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/> (2012年12月20日検索)
- 中華民国教育部重編國語辭典修訂本
<http://dict.revised.moe.edu.tw/> (2012年12月20日検索)
- 中央研究院現代漢語平衡語料庫
<http://db1x.sinica.edu.tw/kiwi/mkiwi/> (2012年12月20日検索)
- リーディングチュウ太
<http://language.tiu.ac.jp/> (2012年12月18日検索)